

母性看護学実習におけるタッチケアサロン事業の活用

著者	笹木 葉子, 渡邊 友香, 加藤 千恵子
雑誌名	地域と住民 : コミュニティケア教育研究センター年報
号	3
ページ	63-67
発行年	2019-05-31
出版者	名寄市立大学コミュニティケア教育研究センター
ISSN	0288-4917
書誌レコードID	AN0001106X
論文ID (NAID)	40021940917
URL	http://id.nii.ac.jp/1088/00001800/



実践報告

母性看護学実習におけるタッチケアサロン事業の活用

笹木葉子* 渡邊友香 加藤千恵子

名寄市立大学保健福祉学部看護学科

キーワード：母性看護学実習 タッチケア 子育て支援活動

はじめに

近年、看護師養成施設は年々増加している。しかし母性看護学実習のフィールドである産科病棟は、少子化に伴う分娩件数の減少等に伴い産科混合病棟が増え、2016年度の実態調査では、産科単科の病棟は154施設(22.2%)と2012年度の調査と比較すると産科と婦人科の混合病棟が増えており¹⁾、実習できる病棟や学生受け入れ人数は減少している。また、2016年には出生数97万6978人と1899年の統計開始以降初めて100万人を割り、少子化は継続している^{2) 3)}。当大学では、近隣市町村の分娩を担う拠点病院で実習している。年間一定数の分娩数は確保されているが、少産化の流れで分娩数は年々減少している。さらに地元の病院以外に周辺で母性看護学実習を行える病院はないのが現状である。当大学の母性看護学実習は4年次前期に配置され、病棟では後期に他の教育機関の実習も受け入れている。2週間4単位全てを1施設で実習すると、実習期間の確保も、実習施設の確保もできない。多くの看護師養成施設も母性看護学実習の確保に苦慮しているように、全ての学生が産科病棟で母子の看護過程を展開することは不可能であった。

平成27年に厚生労働省は、少子化の進展や看護師養成施設の増加を受け、「看護師養成所の運営に関する指導ガイドライン」から、母性看護学実習及び小児看護学実習における臨地実習について、病院以外の施設も実習施設に含めることができ、実践活動の場以外で行う学習の時間も臨地実習に含めても差し支えないと通達した。そこで、当大学では産科病棟と産科外来、地域母子保健活動を活用する方法で2週間の実習構成を立案した。1クール8名を半数に分け、1週間ごとに「病棟実習」と「産科外来実習・地域母子保健活動」の実習構成とした。構成を組み替えたことで、4週間終了時点において、妊娠から分娩産褥新生児そして地域母子保健への継続した看護を意識できる実習にすることができた。大学で行う地域母子保健活動については、教員3名ともにタッチケア指導者認定資格を有し地域で活動していた経験があったため、市民に向けたタッチケアサロンを運営・開催することができた。ここではタッチケアサロン事業を母性看護学実習に活用した具体的実践を報告する。

1. 地域母子保健活動の実習目的

- 1) 病院から地域に戻り日常の中で生活する母子の姿を把握し、看護の継続性を理解する。
- 2) 乳児を持つ母親へ育児支援の場を提供し、実践を通して子育て支援の実際を学ぶ。

2. 方法

タッチケアサロンは、1年間通して月1~2回ペースで開催し、5~7月の実習期間は毎週開催して育児支援を行っている。生後2~12か月の乳児を対象に、タッチケアの方法を伝えると共に、茶話会形式で母親同士の交流の場を設けている。

母性看護学実習では、タッチケアサロンの運営内容とタッチケアの理論と方法を学び、地域における育児

*責任著者 E-mail:sasahappa@nayoro.ac.jp

支援の実際とそこで暮らす母子の現状やニーズの把握を意識して実習する。学生が主体的に母子に関わるために手遊びタイムを設けており、手遊びの題目選びからパンフレット作成、母親への説明とデモンストレーションにより紹介する。その中で母親と乳児の様子を、五感を使って観察し、乳児への関わり方や乳児の発達等を学びさらに母親とのコミュニケーションの場としても位置づけている。

以下に事前準備から実践に至る運営と実習の実際について述べる。

1) 事前準備

- ・タッチケアの理念と方法を学び、新生児モデルで演習する。
- ・学生同士でオイルを使用し、互いにハンドマッサージを体験しタッチのイメージを作る。
- ・学生が母親へ提供する手遊びをいくつか選択し、パンフレット作成と共に指導法を考え練習する。
- ・ホワイトボードにイラストと次第を描き、ウエルカムボード(写真1)を作成する。
- ・実習室にマットを敷き詰め、乳児が安全で衛生的に過ごせる空間を設営する。
- ・玄関とエレベータ前、会場入り口に案内ボード(写真2)を設置する。



写真1 ウエルカムボード



写真2 案内ボード

2) 受け付け

- ・受付順に初回配布のタッチケアメモにスタンプを押す。(初回にはタッチケアマニュアルも配布)
- ・基本的に自由に場所を確保するが、初回の方には案内する。

3) タッチケアアサロン開始

4) 自己紹介

- ・学生の司会により本日の内容を説明し、自己紹介とアイスブレイクを兼ねて、母子の名前と月齢、その日に決めた一言を周り順で紹介する。学生や教員も母親の輪に入り、順で紹介する。

5) 学生による手遊びの紹介と実践

- ・学生は母子の隣に座り、用意した手遊びのパンフレットを配布し、内容を説明する。
- ・学生が手遊びの方法を伝え、一緒に歌いながら行う(学生1名1題紹介)。

6) タッチケアの実践

- ・母親は自前にローションやオイルを用意し、バスタオルの上で子どもを裸にして準備する。
- ・心が落ち着くように、ヒーリング音楽をかけ、始めることを子どもに伝えて開始する。

- ・担当教員はゆっくり手順と効果を伝えながら進める。



写真3 輪になってBGMの中で、多人数でもゆったりタッチケア

7) 身体計測

- ・希望者には体重と身長を計測し、必要時発育状態について伝える。

8) 茶話会

- ・カフェインレスティを配布し、自由に交流する時間を設定する
- ・1歳未満の子どもが舐っても、ぶつかっても安全なおもちゃを出して自由に遊べる空間を作る。
- ・学生は乳児の月齢を意識し、危険のないように見守りながら、母親ともコミュニケーションをとる。



写真4 多くの親子が集まり、月齢ごとに2つの輪になり、学生は人形でタッチケアを実施する

9) 次回の予約確認

- ・次回の予約を確認して見送る。

10) 後片付け

- ・会場を開催前の状態に復帰、清掃し、使用物品等は必要に応じて消毒し保管する。

11) タッチケア事業の実習ふり返りのカンファレンスを行い、準備・実践、学びについてレポートする。

3. 結果および考察

実習期間：2018年5月7日～8月24日（実習日数10日間中タッチケアサロン実習2日間）
 4年生 46名（1クール2～4名、計12クール46名）全員がタッチケアサロンの実習を終えた。
 実習期間中の学生企画運営回数は12回。2018年5月～7月の母性看護学実習期間の間の参加母子は延べ100組、うち新規参加親子数は11組であった。（表1）

表1 2018年度 タッチケアサロン実践実習（母性看護学実習）

月	開催回数(回)	参加者数(組)	新規参加数(組)	実習学生数(人)
5月	4	16	3	4
		5	1	4
		8	1	4
		16	1	4
6月	4	10	1	4
		5	0	4
		8	1	4
		8	1	4
7月	4	6	1	4
		6	0	4
		6	0	2
		6	1	4
計	12	100	11	46

会場設営は、参加していただける感謝の気持ちで準備することが重要である。学生は少しの助言で、対象者の状況を考え、「危険がなく衛生的な環境」と「授乳時の配慮」を考えた設営、「お迎えする気持ち」のウエルカムボード等多方面から点検しながら丁寧に準備していくことができると感じられた。

学生の多くは、産科病棟実習で分娩後の母親が不安そうに自宅に戻っていく姿に、家庭での育児の心配をしていた。しかしタッチケアサロンで出会う、分娩後数ヶ月を経過した母親達が、暮らしの中で自然に育児している様子を見て、毎日の育児を通して「母親」になっていくことを理解する。自信溢れる母親達の姿に、多くの学生が「母親は強くてすごい」と表現している。また、母子と接し、乳児への関わり方や乳児の発達等を学び、母親の子どもへの思いや子育てへの思いを聴き、子育て支援のあり方を知る機会になっている。

学生の実習記録からは、「タッチケアサロンの場がママ友づくりの場になっている事がよく理解できた」「乳児は教科書の知識と比較して思ったより活発な子もいて発達の個人差があることが理解できた」「母親達は子どもの様子にあわせできる場所を臨機応変にタッチしていて、気持ちのよい空間だった」等、育児支援の目的や母子の関わり、乳児の発達段階等、多くの気づきや学びが挙げられていた。また、国家試験終了後の学生からは、乳児の発達の出題があり、タッチケアの乳児を思い出し自信をもって解答することができたと報告し、生きた学びの効果も期待できる。少子化の現在、1歳前の乳児に直接触れる機会は少ない。この体験は子どもと母親の理解に繋がっており、教育効果は大きいと考える。

この実習では、タッチケアやハンドマッサージの事前学習、手遊びの選定とパンフレットの作成、会場設営・撤収、サロンの運営（受付、司会、お茶の提供、母子との交流）と新しい体験の多い実習構成となっており、多岐に渡って気遣いや調整、コミュニケーションが重要である。近年どの看護領域でも、学生のコミュニケーションの困難さが指摘され、学生自身も苦手意識を持っている。実習前日は母親との交流にどんな話題がいいのかと不安を訴えている。特に産科病棟実習で対象との会話に苦慮した学生は、過緊張状態にあ

る。しかしサロン終了時には、「病棟ではコミュニケーションが上手くできなかったが、ここではスムーズに関わる事ができ、母子の関わりに自信を持つことができた」「母親と乳児に上手く関わって楽しかった」「コミュニケーションに自信がついた」とレポートする学生が多く、コミュニケーションへの自信と多岐に渡る学びの深い実習になっている。

学生は、母性溢れる母親の雰囲気と乳児の愛らしさに癒され、終了後も柔らかい表情をしており、母性・父性の開発に繋がっている事を実感する。特に男子学生は自分の立ち位置を気にし、遠慮がちで消極的になる傾向にある。しかし男児を持つ母親から、男の子の思考や父親の立場について質問され考えるうちに、性別に囚われ消極的な実習になっていた自分に気づき、その後楽しく母子と関わる事ができていた。また学生は、複数回参加している母親との会話から、「母親の憩いの場やママ友づくりの場になっている」ことに気づき、地域における子育て支援の重要性を理解する。さらに自由に遊ぶ乳児の観察から、月齢による発育や発達の流れや個別性にも気づくことができていた。

このように、タッチケアサロン事業を母性看護学実習に活用した実習は、地域の母子への育児支援と共に、学生の対象理解への学びにもなっていた。

以上の事から、母性看護学実習におけるタッチケアサロン事業の活用によって、『病院から地域への子育て支援の継続性』、『日常の中で生活する母子の姿』、『地域の子育て支援の実際』の理解が深められ、実習の目的は達成できたと考えられる。

今後も母性看護学実習にタッチケアサロン事業を活用し、母子の理解や地域母子保健活動の重要性を理解する実習として継続していきたい。

タッチケアサロン事業を運営して4年が経過し、第1子の時に参加され、2子出産後にも参加されるケースも増えた。時には父親の参加もみられ、子育て中の親子にこの事業が定着しつつあることを実感する。

最後に、タッチケアサロン事業が母子に継続して関わることのできる貴重な場として、多くの母子が継続して参加して下さることに感謝したい。

参考文献

- 1) 吉川久美子 特集 産科混合病棟の中で助産師にできること 産科混合病棟の現状と目指すべき方向性 助産師雑誌 VOL. 72 NO. 04 246-252
- 2) 母子保健の主なる統計 公益財団法人母子衛生研究会編 母子保健事業団発行 平成 29 年刊行 2018. 3. 23
- 3) 平成 30 年度少子化社会対策白書 内閣府編 平成 30 年 7 月 31 日発行

